

# 聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

## 第8章 祈りについてのキリストの教え①



### 序論

祈りについて、意味のある教え、洞察に富んだ教えをいただこうとするならば、誰よりも聞かれる祈りを捧げられた方、非常に強い確信を抱いておられたがゆえに「父よ。…わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました」（ヨハネ 11:41-42）と言うことのできた方から学ぶのが一番です。

しかしながら、祈りについて学ぶよりもはるかに大切なことは、祈ることを学ぶことです。

祈りについて学ぶことはあくまで、それでより良く祈れるようになる場合に限って有意義なのです。



天について教える中で、イエスは弟子たちに対し、あなたがたは私が行こうとしているところへの行き方を知っていると語られました。しかし、トマスは、自分はイエスがどこに行こうとされているかは知らず、そこへの行き方など知る由もないと言いました。イエスはお答えになりました。「わたしが道であり、…わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」（ヨハネ 14:6）。イエスの教えの中で、神に近づくことについてこれほど直接的に語られている箇所はありません。これは救いのみならず祈りにも当てはまることです。というのも、イエスのみが「新しく、生きた道」なのであり、私たちがいと高きところに入れるのはこの方による（ヘブル 10:19-20）のだからです。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。（ヘブル 10:19-20）

この真理は絶対的です。誰も他の名前によって、あるいは他の方法によって神に近づくことはできません。「神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです」（I テモテ 2:5）。現代のリベラルな（超自然主義的なものに反対する）神学者や哲学者などは、そのような見方はとても

偏狭で頑迷だと信じさせようとしてくることでしょう。しかし、私たちがひれ伏さなければならないのは、最終的な審判がなされる法廷、すなわち聖書に対してなのです。

イエスの御名によって祈りを捧げるとき、私たちは単に「イエス様のお名前によって」というくだりを、とりわけ形式的ないし機械的な形でつけ加えるだけであってはなりません。ご自分の御名によって求めるということ語られたイエスは（ヨハネ 14:13）、単に正しい言葉を語るという以上のことを意味しておられました。聖書においては、名前はその人とその性格や性質を代表するものでした。ですから、イエスの御名によって祈る際には、そのご人格、ご性質、みこころと一致する形で祈らなければなりません。また、イエスがどのようなお方であるのかを認識し、その権威に自らを明け渡し、欠けのない信仰をイエスに置かなければならないのです。したがって、祈りに際しての私たちの願いは常に、イエスと父なる神とに栄光を帰するということになります（使徒 3:16,4:30、ローマ 15:6 参照）。そればかりではありません。イエスの御名によって祈ることにより、私たちは、神に近づくに際してはイエスこそが唯一の希望であるということを認めるのです。罪深い人間は、聖なる神に自分自身の力で近づくことはできません。神に直接に近づこうものなら、焼き尽くされてしまうのです。「神は焼き尽くす火」（ヘブル 12:29）だからです。このため、旧約聖書の人々は至聖所には決して足を踏み入れようとはしませんでした（上巻・第2章参照）。彼らにとって神に近づく唯一の方法は、年に一度だけ至聖所へ入ることを許されていた大祭司を通してであり、それは必ず血を伴うものでした（ヘブル 9:7-8 参照）。新しい契約の下にあっては、イエスが永遠の大祭司です。ご自身の血の捧げものによって、たえず、そしていつまでも、父なる神と共にある方なのです（ヘブル 9:11-12）。私たちはこのキリストのゆえにのみ、神に近づくことができるのです。キリストにあって私たちの罪は取り除かれたのであり、このキリストを通して、そしてキリストを通してのみ、私たちは神に近づくのです。

- クリスマスは聖霊の与えてくださる力により（ローマ 8:26-27）

御霊もまた同じように、弱いわたしを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。

- 唯一の仲介者なるイエスを通して

（I テモテ 2:5）神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。

（ヨハネ 14:6）イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

- 父なる神のもとに来る

ここで、祈りのプロトコル（手順）を考えてみましょう。御父・御子・聖霊は一つですが、聖書によれば、祈りは父に向けられるべきだとされています。同時に御父は、言葉の正しさよりも心の状態を考慮して下さるのであり、正確なプロトコルが欠けているからといって祈りを拒むようなことはされません。事実、クリスマンにとっては、祈りの中でイエスや聖霊に語りかけることも稀なことではありません。ただし、そうではあれ、祈りの型というものは、聖書に示された形に従って理解されるべきです（前頁を参照）。